

竹の子童子^{どうじ}

(熊本県^{くまもとけん})

むかし、あるところに、三吉^{さんきち}という桶屋^{*おけや}の小僧^{*こぞう}さんがいました。

ある日のことです。三吉は、桶を作るための竹を切りに、うらの竹山に行きました。すると、どこかで、

「三ちゃん、三ちゃん」とよぶ声がしました。

「だれだ」と、三吉がきくと、

「三ちゃん、ここだ、ここだ」といいます。

「ここって、どこだ」

「ここだ、竹の中だ」

三吉は、声が聞こえてきた竹のそばへ行ってみましたが、だれもいません。ふしぎに思つて立っていると、その声が、

「三ちゃん、おれを竹の中から出してくれ」といいました。三吉は急^{いそ}いでその竹を切つてみました。すると、竹の中から五寸^{*すん}くらいの小さな男の子が出てきました。三吉はおどろいてひっくり返^{かえ}つてしまいました。男の子は、

「ありがとう、三ちゃん」といいました。三吉は、こわごわ男の子をてのひらに乗^のせて、

「おまえはいつたい、なんだ」とききました。男の子は、

「おれは天人^{てんにん}だ。悪い竹の子^{わる}につかまって、竹の中に入れられたのだ。それで、天に帰ることができなかった。ちょうど三ちゃんが来たから、助^{たす}けてもらったのだ。こんなに嬉^{うれ}しいことはない」といいました。

「でも、どうしておれの名前を知っているんだ」と、三吉がたずねると、男の子は、

「おれは、世界^{せかい}のことはなんでも知っている」と答えました。

「ふうん。おまえ、なんていう名前だ」

「竹の子童子^{どうじ}だ」

「竹の子童子、歳^{とし}はいくつだ」

「おれは、千二百三十四歳^{さい}だ」

「へええ」

三吉が感心かんしんしていると、竹の子童子はいいました。

「すぐに天に帰りたいけれど、おまえに助けてもらった恩返しおんがえをしなくちゃならない。このまま帰ったら、天のお姫さまひめにしかられる」

「恩返おんぱんして、何をしてくれるんだ」と、三吉がきくと、竹の子童子は、

「七つだけ、三ちゃんの願い事ねがごとをかなえてやる」といいました。

「ほんとうか。うそじゃないだろうな」

「天人は、うそはいわない」

竹の子童子はそういって、三吉に、まじないのことは教えてくれました。そこで、三吉は、教わったとおりに、三回、口の中で唱となえてみました。

竹の子、竹の子、お侍さむらいになあせ

竹の子、竹の子、お侍さむらいになあせ

竹の子、竹の子、お侍さむらいになあせ

そのとたん、三吉はりっぱな侍さむらいになっていました。三吉は大喜おおよろこびしました。そして、竹の子童子にお礼れいをいって、修行しぎやうの旅たびに出ました。

竹の子童子は、そのまま天へ帰っていききましたとき。

おしまい

＊ 桶屋 桶を作ったり売ったりする人。桶は、ひのきや杉すぎなどの薄うすい板いたをならべ合わせ
て輪わにして底そこをつけ、竹のタガでしめて作る。

＊ 小僧 店つかで使つかわれている少年。

＊ 寸 長さの単位たんい。一寸は約三センチメートル。